

第八編 現代のパン

# 第一章 統計からみた現代のパン

## 第一節 パン食の試練時代

本篇はパンが自由販売になつた昭和二七年六月から昭和四三年までの、合計一七年間のパンのあゆみであるが、この時期は戦後急速に普及したパン食が横ばいに移行した時期であつたといふことができよう。

しかしこれは必ずしもパン食が頭打ちしたからではなく、国民一般の生活水準が上昇したために、穀類の一人当り消費が減少して、乳肉卵や脂肪の消費量が急増した為でもあつた。この点はこの時代に食生活のいちぢるしい洋風化がみられたことから容易に立証することができる。

しかしながらそのような理由はともあれ、実際問題としてパンの伸びは昭和三〇年を頂点として横ばいから微減にうつり、遂に昭和三十五年には三十年の七五万四千屯が、六二万八千屯におちこんだのである。この間学校給食パンは累年増加の一途をたどつていたのだから、市販パンの消費が相当減つたことは明かである。この点は昭和二九年の市販パン実績六六万二千屯が三五年には四七万屯に低下したことによつて如実に示されている。しかしこうしたパン業界の不況は、三五年をもつて底を衝き、翌年から微増に転じ、今日までそうした微増の傾向はジグザグのあゆみながら持続している。しかしながらその増加率ははなはだにふい。

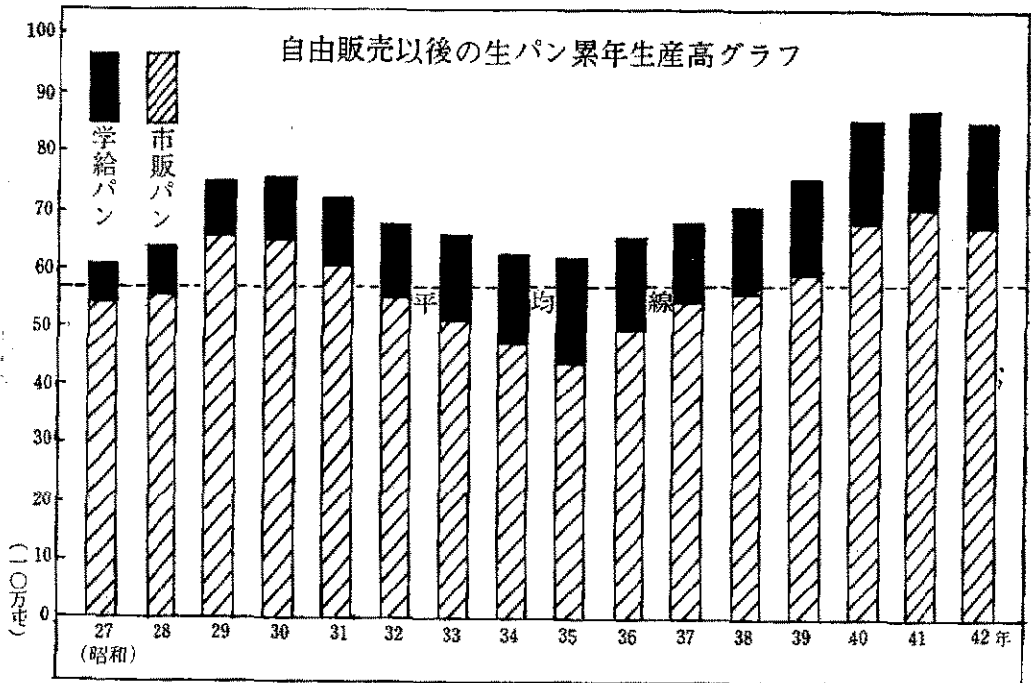
したがつてパン業界はこのようなかんばしからぬ客観状勢の影響をうけて多くの試練を経験した。それは業界の販売競争が次第に激化して、目を覆わずにはいられないような弱肉、強食、優勝、劣敗のきびしい商戦が展開されたことと、その結果として業界地図が大きく塗りかえられ、大手と零細に二分される傾向が顕著に認められるようになった事実を示されている通りであるが、こうなつた大きな原因の一つは、戦後経済の高度成長の結果として、労働力の不足が顕在化し、中小以下の企業は仕事があつても人

手がないという窮地に追い詰められたからである。

しかしこの時期の後半期に入ると、貿易の自由化について資本取引の自由化が実施されることになつたので、外国の巨大メーカーの上陸作戦にそなえて、国内体制を整備するという大義名分の下に、大手間の市場占拠率拡大競争がはげしくなり、その共喰い状態は一段とそのはげしさを増していつた。こうした現象は食品工業の業種別自由化の進行と共に、一層はげしくなるものとみられているが、その実体には改めて言及することとしていまここに統廃後の生パンの累年生産高を示せばあつた以下の通りである。

麦類自由販売（昭二七・六）以後の生パンの累年生産高内訳表（屯）

年次別	市販パン	学給パン	合計
昭和二七年	五四七、六二〇	五八、〇〇〇	六〇五、六二〇
二八	五六五、九七四	六八、六二六	六三四、六〇〇
二九	六六一、六三二	八六、三三八	七四八、九六〇
三〇	六五三、八八三	一〇〇、一一七	七五四、〇〇〇
三一	六一二、九六五	一一〇、〇三五	七二三、〇〇〇
三二	五四八、七八四	一二四、二二六	六七三、〇〇〇
三三	五一四、三六八	一四一、六三二	六五六、〇〇〇
三四	四八二、五六六	一四九、〇八八	六三一、六五四
三五	四七〇、四〇二	一五七、六〇〇	六二八、〇〇二
三六	五〇二、〇六二	一五七、六〇〇	六五九、六六二
三七	五四九、八六〇	一四〇、三二〇	六九〇、一七〇
三八	五五八、四四二	一五七、六〇五	七一六、〇四七
三九	六〇二、四二五	一五七、六〇五	七六〇、〇三〇
四〇	六九八、七五〇	一六六、二五〇	八六五、〇〇〇
四一	七一、一〇〇	一七二、九〇〇	八八四、〇〇〇
四二	六八五、八九三	一七九、六九五	八六五、五八八
平均	五八五、〇〇〇	一三一、〇〇〇	



以上が統制が撤廃された昭和二十七年以降のパンの累年生産高で、昭和二十七年に六〇万屯だったパンの生産高がそれから十四年後の昭和四十一年には八八万屯台に到達している。

しかしグラフを一見するとよくわかるように、昭和二十九年を頂点としてパンの生産高は頭打ちとなり、それから三五年まで低下の一途をたどった。

しかしながら翌三六年からパンは再びゆるやかな上昇線を描くようになったが、四〇年から横ばいに転じ、その横ばい状態は四二年までつづき、四三年になると再び上昇に転じた。

問題はこうした起伏の原因如何であるが、これを要約するとあらまし次の通りではないかと推定される。

△昭和二七～二九年△ 実効米価が割高だった為に米の代替食としてパンが伸びた。

△昭和三〇～三五年△ 昭和三〇年の未曾有の大豊作でヤミ米価が低落した為に、実効米価が大幅に低下したので、パンは内地米に押されて微減の方向をたどった。

△昭和三六～四〇年△ 相次ぐ消費者米価の値上げの結果、麦類の対米比価が低下したので、パンは再び微増の方向をたどった。

△昭和四〇～四二年△ 貿易の自由化で輸入食糧が激増したので、パンはこれに押されて微増から横ばいに転じた。

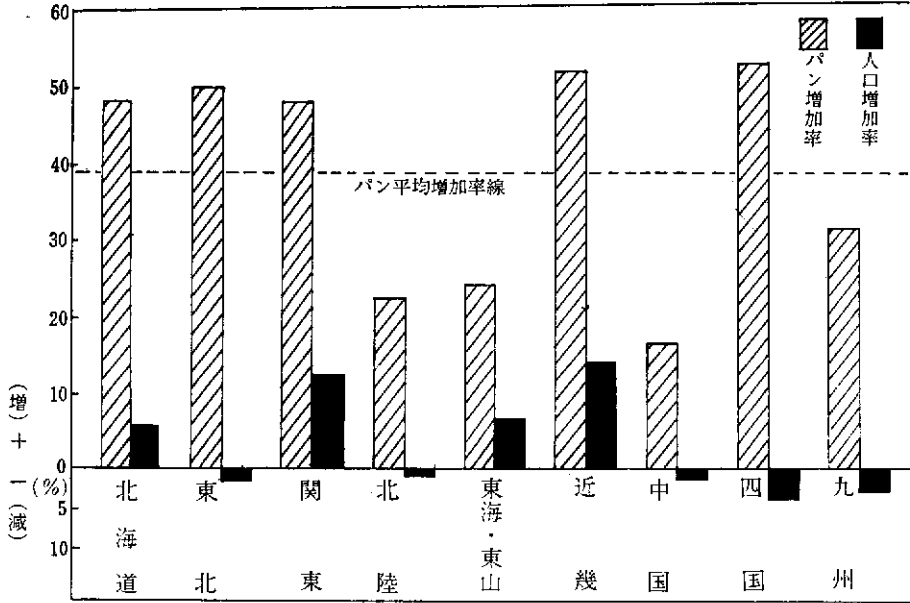
△昭和四三～四五年△ 打ち続く豊作で貯蔵米が激増し、古米の配給率が高くなった為米が不味になり、その結果米食率が低下し、パン食率が増加したが、このような傾向は今後数年間つづくだろうとみられる。

以上が統制後の市販パンのうごきのあらましであるが、学給パンは昭和三五年まで増加の一途をたどり以後三九年まで横ばいで推移したが、四〇年から再び上昇に転じて現在に及んでいる。しかし今年に入ってから政府が歴大な量の持越米処分の一方法として、学校給食に米をとりいれることを考慮しはじめたので、学校給食にも一つの転機が訪れた感が深い。

つぎに昭和三〇年代のパンのプロック別伸張率をみると、その実体は次表の通りであつて、増加率の高かつたのは人口集中率の高い関東・近畿と低開発地域の東北・四国および北海道地区であつた。

昭和30年代の製パン高及人口の地域別増減表

(昭和30年を100とした38年の増減率)



昭和三〇年代のパンの地区別生産高

昭和三〇年代	昭和三〇年	昭和三八年	年次別	区分
三九,〇六四,三三三	一〇〇	一〇〇	三九,〇六四,三三三	北海道
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	東北
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	関東
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	北陸
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	東海山
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	近畿
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	中国
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	四国
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	九州
三〇,三六四,九三六	一〇〇	一〇〇	三〇,三六四,九三六	計

昭和三〇年代の地区別人口

昭和三〇年代	昭和三〇年	昭和三八年	年次別	区分
五,〇九六,九二六	一〇〇	一〇〇	五,〇九六,九二六	北海道
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	東北
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	関東
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	北陸
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	東海山
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	近畿
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	中国
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	四国
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	九州
四,六五九,三三三	一〇〇	一〇〇	四,六五九,三三三	計

なお昭和三十一年と三八年の府県別製パン実績は次表の通りであつて、その全体としての伸び率は二五・六％である。

都道府県別製パン実績（単位小麦粉屯）

地方別	昭和三十一年	昭和三八年	増加率
北海道	二九、一〇六	四二、八六三	四七、六％
（計）	二九、一〇六	四二、八三六	
青森	八、二九四	一一、一一二	五、〇％
岩手	五、三〇二	一〇、五九〇	
宮城	一一、五五〇	一八、二三七	
秋田	八、〇〇八	一一、〇九〇	
山形	六、一六〇	七、四〇九	
福島	七、九四二	一一、一七〇	
（東北計）	四七、二五六	七〇、六九八	
茨城	七、六二二	一〇、一一二	
栃木	九、〇四二	一〇、三三三	
群馬	一一、六五〇	一三、三五〇	
埼玉	一八、五〇二	二八、一三五	二五、二％
千葉	一七、七一〇	三〇、〇八五	
東京	一一五、六九六	一三八、四八三	
神奈川	四四、六八二	五一、二八六	
（関東計）	二二五、八九四	二八一、七八四	
新潟	一三、九六二	一四、八〇五	
富山	五、八五二	七、四二九	
石川	五、四二二	一〇、三〇六	

福井	三、七四〇	三、九九六	二六、〇％
（北陸計）	二八、九六六	三六、五三六	
山梨	三、四九八	五、六七六	
長野	一四、八七二	一六、二三六	
岐阜	一〇、八六八	一一、五二一	
静岡	二二、一五四	二六、一三四	
愛知	四四、三七四	五五、〇九七	
三重	八、〇七四	一〇、八八〇	
（東山、東海計）	一〇三、八四〇	一二五、五五〇	
滋賀	三、〇八〇	四、〇九四	
京都	二〇、九三二	二〇、一八五	
大阪	七一、三三四	九六、八〇七	
兵庫	三七、一三六	三四、九九五	
奈良	三、八七二	四、三九八	
和歌山	六、五五六	七、二二八	
（近畿計）	一三九、〇一八	一六七、七〇七	
鳥取	三、一六八	四、五七七	
島根	三、一六八	三、九九〇	
岡山	一三、三九八	一三、一九八	
広島	一六、五六六	二〇、六一九	一八、〇％
山口	一三、五三〇	一五、四九三	
（中国計）	四九、四三〇	五七、八七七	
徳島	二、六六二	四、四八一	
香川	四、七七四	四、一三六	
愛媛	六、四〇二	九、一六五	

高知	二、二四四	三、六九五	
(四国計)	一六、〇八二	二四、四七七	五三、〇%
福岡	三一、四三八	三六、三八一	
佐賀	五、七二〇	七、八八八	
長崎	一、六一六	一三、七〇一	
熊本	一〇、四〇六	一一、八〇四	
大分	六、一六〇	八、五〇五	
宮崎	三、三三二	六、一八五	
鹿児島	五、五〇〇	一一、二四三	
(九州計)	七四、一一二	九六、七〇七	三一、〇%
総計	七五九、九九〇	九五四、九一五	一二五、六%

## 第二節 現代日本のパン年譜

以上が昭和二十七年以降のパンのあゆみの概観であるが、各論に入るまえに、この時代のパンの年譜を示せばあらまし以下の通りである。

### 現代のパン年譜(昭二七~四二)

年	月	事	項
昭和二十七年	六	一日麦類自由販売の為パン自由商品となる	
	六	麦類は直接統制から間接統制に移行(但し学給パン用のみは直接統制継続)統制解除により製粉業界の競争激化	
	一〇	保安隊発足	
	一一	小麦粉建値の引上げ実施	
二八	二	NHKテレビ放送開始	

二九

四	学給パン用小麦粉のエンリッチ正式決定
六	公取精糖各社の価格協定違反を追求
七	砂糖の統廃で精糖各社の設備拡張競争激化
七	日米MSA交渉はじまる
七	朝鮮戦争の休戦協定成立
八	MSA交渉で米日本の「経済要請を削除(目的は防衛)」と指摘
八	改正独禁法公布(不況カルテル合理化カルテル容認)
一〇	日米通商友好条約発効
一一	財団法人日本パン科学会誕生
	栄養改善法公布
	ハイスピードミキサー時代来る
一	五〇銭以下の小銭廃止
二	食生活改善協会誕生
三	日米MSA協定調印
三	オリエンタル酵母工業とスタンダード・ブランドの
三	イーストに関する技術提携に製粉業界反対を唱える
四	二六日下谷公会堂で明治パン設置反対パン業者大会
	ひらく(政治問題化)
六	明治パン反対第二次業者大会ひらく
六	一四日明パン反対の業者代表東畑農林次官を釣し上げる
六	学校給食法成立
六	自衛隊、防衛庁発足する
七	新宿中村屋の笹塚工場竣工

七	マーガリン・シヨートニングの日本農林規格告示される		
七	防衛庁・自衛隊発足	三一	
九	食糧タイムス社、パンニュース社共催の国際製パン技術大講習会を各地で統開（講師米、仏、独から来朝）	二	
一一	社団法人食生活改善協会誕生	四	
一一	米国余剰農産物買付交渉妥結	六	
一二	明治パンとその反対同盟の話し合い成立（条件付外貨割当）	六	
一二	ガットに正式加入	八	
一	東京のパン業者牛乳消費協会と連繫、一〇円牛乳の店頭販売開始	一一	
二	東京にパン屋二世の青雲会誕生（会長永藤三朝）	一一	
三	全国給食パン組合連合会誕生	一二	
五	京都のパン屋二世京都新人会を創立（会長統木満那） 続いて愛知青年クラブ誕生		
八	前年から大手製粉各社の増資相次ぐ 豊島振興会館で明治パン戸田橋工場設置反対業者大会ひらく（明治パン建設を強行）	三三	
一〇	生産過剰のため小麦世界相場暴落	一	
一〇	空前の大豊作で内地米収獲高一、二三八万屯を突破 ヤミ米価惨落、このときよりパン食横ばいとなる	四	
一一	日本洋菓子技術会館竣工	五	
一二	米国余剰農産物市場二〇〇万ドル調印	六	
一二	麦価引下期成同盟誕生	八	
		九	
			山崎パン敷地三千坪の江戸川工場竣工 神武景気
			第二次余剰農産物協定に調印
			全日本パン協同組合連合会成立（全パンと日本パン協定合同）
			東京都パン組連成立（会長木村栄一、加入四一組合）
			夜間課程をおく高等学校における学校給食に関する法律成立
			明治パン戸田橋工場操業開始
			公取大手製粉四社の値上協定に警告
			第三次米余剰農産物の受入れ決定
			日本国連に正式加盟
			大手水産各社の上陸作戦開始
			富士製粉ニューマチック・ミルを瑞西より購入製粉ニューマ化の先べんをつける
			高原景気
			日本道路公団発足
			第三次余剰農産物の受入れを正式辞退
			砂糖、水飴の高騰により大缶ジャム値上げされる
			農林大臣国産マーガリンの開祖山口八十八を表彰
			東京世田谷に真中パン新工場竣工（のちあけぼのパンが吸収合併）
			栄養改善法による強化パンの厚生省許可百件を突破
			第四次余剰農産物正式受入れ決定
			一六日初のパン祭を日比谷松本楼で挙行

一〇	東京板橋に喜多パン新工場竣工(のちヤマザキパンが吸収合併)
一六	群馬パン協理事長松浦福三郎全パン会長に就任
八	中小企業団体の組織に関する法律公布
八	糖商の倒産合併続出
八	鍋底景気、株式暴落、五千円札発行
一七	イーストの不況カルテル認可
一七	最低賃銀法公布
一七	仙台の平塚パン新工場竣工
一七	食糧加工砂糖実需者協議会糖価引下を政府に要望
一七	武田薬品のパン界進出問題となる(中止)
一七	千葉の川島パン新工場竣工
一一	日清製粉正田社長の令嬢美智子さまの皇太子妃正式決定
一一	過当販売競争抑制のため東京都パン工業組合創立(以後各地に工組続出)
一一	メートル法実施
一一	第一屋多摩の三福パンを吸収合併
一一	日本洋菓子史刊行
一一	大阪から東京に移転した日本パン技術研究所初の開校式
二	東京パン協連と東京パン組連創立
三	新国際小麦協定成立で日本の買付義務五〇%に低下
五	山崎パン横浜工場竣工 マーガリン・ショートニングの合理化カルテル認可

六	日魯漁業あけぼのフレッシュユパン餅を創立
九	東京都パン工業組合設立認可
一〇	関口フランスパン二代目高世勇司逝く
一〇	ヤマザキパン横浜のミリオンパンを吸収合併
一〇	岡山木村屋創立四〇週年記念祝典挙行天の岩戸景気頭脳パン連盟発足
五	カリフォルニアレーズン宣伝開始
六	東部製パン製菓機械工業会誕生
六	あけぼのパン連続製パン装置導入決定
七	日清産業パンのポリ包装機を開発
八	東京でパンの適正価格協定成立
八	敷地三千坪のヤマザキパン杉並工場稼働開始
八	日東製粉晴海工場竣工(工費二〇億円)
九	名古屋のシキヤマパン四〇週年記念祝典挙行
九	二〇日あけぼのパンの連続製パン装置用外貨割当決定し、パン工組無力説拡がる
一〇	カナダ政府小麦局東京事務局開設(米・加の小麦売込競争激化)
一〇	農林省内麦パンの奨励にのりだす
一一	丸三ジャム創立五〇週年記念祝典挙行
一一	第一屋蒲田工場竣工
一一	藤沢製作所東京工場竣工
一一	「パン問題基本調査会」発足
一一	松月堂大泉工場竣工
一二	ヤマザキパン浅草の国際劇場にお得意一万八千人を



- 招待
- 安保そらどう
- 新安保条約発効
- 日立土地製パン部を設立

通勤地獄時代

川口市に日産六〇〇袋の太陽堂新工場竣工

あけぼのパンの連続製パン装置一〇月稼働の予定と

上野社長発表

日本製パン機械工業会創立(会員東京三二、関西八

その他一一、計五一社)初代会長藤沢義雄氏

五月一日から静岡パン協最底賃銀制を採用

東京都パン協創立二〇週年記念祝典

神戸に近畿食品新工場竣工

マーガリン・ラード両工業会合併

政府「貿易自由化促進大綱」を決定

秋田市たけや饅日産二〇〇袋工場竣工

和歌山市泉屋日産一五〇袋工場竣工

名古屋キンシマパン一万坪の刈谷新工場に連続製パ

ン装置の導入を決定

名古屋長栄軒三千坪の新工場建設決定

明年十月から製パン機械の貿易自由化方針公表

物価騰貴と労務不足激化しパン工組続出する

東京都の人口一千万人を突破

東京板橋喜多パンの経営危機に瀕す

(山崎パンが吸収合併)

- 一
- 二
- 三
- 四
- 五
- 六
- 七
- 八
- 九
- 一〇
- 一一
- 一二

千葉製粉千葉市の川口パンを吸収  
第一屋板橋工場竣工

「月が瀬」千葉食品を吸収する

豊年リーバの設立に食品業界反対

中村屋株式公開東証第二部上場

農林省内表パン奨励資金として二五〇万円の支出確

定

学給パンのビタミンA添加B<sub>1</sub>増量決定

焼失した仙台虎屋の新工場竣工

名古屋長栄軒の新工場竣工

名古屋敷島パン刈谷工場竣工

山崎パン板橋の喜多パンを吸収

山崎パン株式公開東証第二部上場(四一年一〇月第

一部上場株となる)

船橋食品株式公開東証第二部上場

あけぼのパン連続製パン工場竣工

第一屋株式公開東証第二部上場

貿易自由化決定

三越で「世界洋菓子」展開く

愛知の布袋食糧日産五〇〇袋工場竣工

公取東京パン業者の値上協定の審判開始

あけぼのパン真中パン及信濃屋を吸収合併

丸三ジャム大宮工場竣工

第一屋、フジパン連続製パン導入方針を変更中止と

決定

二	三菱商事日清製粉特約店（大口卸）契約成立
二	フジパンの名古屋郊外豊明工場竣工
三	札幌の日糧ライバルの亀屋を合併
四	パン用機械外貨割当制廃止
四	世界一のパン業者コンチネンタル・ベーキングのラ ーフリン社長市場調査のため来日
四	船橋食品日之出工場（船橋市）竣工
五	月島食品妙見島工場竣工
五	山崎パン武蔵野工場（一万五千坪）地鎮祭挙行
五	日本イースト社長柴山久喜逝く
五	京都進々堂創立五〇週年記念「世界のパン」展開催 伏見工場竣工
五	農林省食糧庁食糧研究所竣工
六	静岡市エビス屋新工場竣工
六	資本取引の自由化を閣議決定
七	中小企業基本法公布
七	ソントン株式会社公開東証第二部上場
七	竹島パン東京町田工場竣工（昭四三フジパン吸収合 併）
七	浜松市のマルチ・ヤタロー工場竣工
七	豊年リーバ設立認可
七	仙台平塚パンの郡山工場竣工
九	横浜学給パン専門工場竣工
一〇	日本製粉創立七〇週年記念祝典挙行
一〇	一八日従業員三〇〇人以上の大手が日本パン工業会

一一	を創立
一一	昭和堂茅ヶ崎工場（神奈川）竣工
一一	松月堂川崎工場竣工
一	一四工場合同して石川県パン工業特創立
一	山崎パン千葉工場増設完了
一	第一屋横浜工場竣工
二	日清製粉中央研究所竣工
二	二社合同の東海パン（愛知）新工場竣工
五	横浜かもめパン新工場竣工
四	日米製パンセミナー協定調印
四	沼津ベーカーリー増設完了
四	製パン企業中小企業近代化促進法指定業種と決定
四	シキンマパン刈谷工場連続製パン機稼働
五	伊藤パン岩槻工場竣工
五	ナビスコの神奈川県相模原市進出の噂拡がる
五	食糧庁に食品工業改善合理化研究会誕生
五	第一屋高崎（群馬）工場の新設決定
五	宇都宮文明軒新工場竣工
五	愛知パン協創立一五週年記念祝典
五	大阪パン協創立一〇週年記念祝典
五	大阪木村屋高槻工場竣工
六	食糧庁一五週年記念祝典
六	水戸パン新工場竣工
六	森永ゼネラルミル設立
七	マルエスベーカーリー八尾工場竣工

四〇

七	中小企業庁一五週年記念祝典で、神奈川及長野パン協を表彰
八	全パン連パン工業組合の設置促進を決定
八	製粉会館竣工
九	フランスからパン学校カルベル教授来朝
九	名神高速道路開通
一〇	カステラの文明堂東京工場竣工
一〇	城東パン八尾工場竣工
一〇	岡山木村屋倉敷工場竣工(敷地一、一〇〇〇坪)
一〇	広島永井パン六〇〇袋工場竣工
一一	清水パン(静岡県)新工場竣工
一一	日粉横浜工場増設完了(東洋一日産八三六噸)
一〇	東海道新幹線開通
一〇	オリンピック東京大会開催
一	景気好転
一	第一屋高崎工場竣工
一	押切機械AMFの国内販売権取得
二	宇千喜パン横浜戸塚工場竣工(昭四二太陽堂吸収)
二	オリオンパン(岩手)花巻新工場竣工
二	ヤマザキパンスイスロールの機械化大量生産開始
三	東京九十パン新工場竣工
三	新潟市に六社合同東洋パン発足
三	新潟市に三信食品工業新工場竣工
四	山形糧穀パン工場増設
四	近代化促進法融資で正和パン(三重)工場竣工

四一

四	中小製パン企業近代化五カ年計画成立
四	昭和産業船橋食品コンビナート製粉部試運転開始
五	宮城県の二一社合同加賀パン設立
五	平塚パン郡山工場(日産五〇〇袋)竣工
六	砂糖不況カルテル認可
六	安達巖氏著「パンと日本人」(日経叢書)出版記念会
七	シキマパン大阪工場第一期工事完了
八	阪急共栄物産新工場竣工
八	来年三月日糧と伊豆屋対等合併を決定
九	シキマパン奈良県郡山に新工場設置を決定
八	食糧庁食品工業改善合理化研究会委員に安達巖氏就任
八	昭和堂茅ヶ崎工場一千袋工場となる
一〇	木村屋総本店三芳工場(埼玉)竣工
一一	金沢市ナニワパン新工場竣工
一一	神奈川県パンセンター新工場竣工
一二	パン業界の救人充足率二四%に低下
一	宮崎県パン協一市一工場に整理方針を決定
一	千葉食品コンビナートに山崎パン参加を決定
二	栄喜堂(東京)三芳工場(埼玉)竣工
二	ヤマザキパン一〇億増資
三	船食パン草加(埼玉)工場竣工
三	高知スーパー三〇〇袋工場竣工
三	福島に企業合同のパン洋菓子センター誕生

四二

三	日立市川尻に森島パン工場竣工
三	浜松市に七社合同マルトパン五〇〇〇袋工場竣工
五	三幸機械新工場竣工
五	フジパン大阪に新工場を計画
五	ヤマザキパン吹田(大阪)工場竣工
八	ヤマザキパンと大阪パン協との販売紳士協定不成立
八	シキンマパン奈良工場の建設延期
八	ヤマザキパン大阪パン協の紛争西田調停により妥結
九	全日本九十パン協組創立
一〇	ドーナツミツクスの日清DCA設立認可
一〇	山崎パンキャンデー、チョコレート部門に進出
一〇	中村屋東京新工場建設を決定
一〇	コロパン洋菓子工場竣工(五〇週年記念)
一一	田村屋食品(長野県)工場竣工
一一	山崎パン株式会社第一市場上場
一一	札幌の日糧九十パンを吸収して東京進出
一一	米国加州レーズンの日本市場占拠率九〇%を突破
一一	アメリカン・ペーカーリーの日本進出のうわさ流布
一一	京都にユニオンペーカーリー(企業合同)の五〇〇〇袋工場竣工
一一	学給パン用粉の漂白問題となる(中止)
一一	ヤマザキパン九州・静岡進出の噂横行(翌年九州進出)
一一	木村屋総本店神奈川工場の新設決定
一一	第一屋金町工場竣工

二	マーガリンの標示公取で問題となる
二	京都のゴールド西洋軒新工場竣工
三	函館精養軒新工場竣工
三	フジパンアーノルドペーカーリーと技術提携して合弁会社設立
三	中村屋大阪新工場竣工
三	ヤマザキパン名古屋新工場竣工
三	(ヤマザキパン南大阪に新工場建設を計画)
五	コンチネンタル・ペーキング及びナビスコ日本市場の調査開始
五	日本パン技術者協会創立
五	小麦粉、砂糖、油脂、パン、菓子非自由化品目と決定
五	ヤマザキパンサンドウキツチプロモーションに五億円を投入
五	シキンマパン犬山工場竣工
六	フジパン東京工場竣工
八	ヤマザキパン新潟市のチューリップ食品を吸収
八	第一屋西独ウオル社と提携合弁会社を設立
八	ヤマザキパンスーパーマーケット部門に進出
八	森永ゼネラルミルがケーキミックスを新発売
八	日産一〇〇屯以下の工場整理をめざす製粉工業近代化五カ年計画決定
八	東京ブレット商事機新設(東パン関係)
八	愛知県岡崎パン新工場竣工

八	不二屋外資との提携決定
八	コンチネンタル・ベーキング社員に対し日本語教育開始
九	月島食品新工場竣工
九	ホシ産業鐘化との提携成立
八	秋田市のタケヤとスズヤ合併
九	小石川関口町フランスパン新工場竣工
九	三重県四日市市のダイヤパン四階建工場竣工
九	パン食普及協テレビ宣伝開始
九	山崎パン仙台進出を決定(千袋工場)
一〇	函館精養軒新工場竣工
一〇	木村屋総本店藤沢(神奈川県)工場竣工
一〇	函館に四社合同毎日パン誕生
一一	山崎パン国際レベルの大型ガスオーブンを導入
一一	第一屋根橋工場を廃止し蒲田工場を増設
一一	フジパン冷凍生地卸売にのりだす
一一	太陽堂宇千喜パン新工場を入手、横浜に進出
一一	福岡のセブンパン斎藤パンを合併
一一	千葉製粉新工場竣工
一一	学給パン専門の群馬パンセンター竣工
一一	千葉食品コンビナートのヤマザキパン工場竣工
一一	丸三ジャム倒産
一一	山崎パンQBA進会員となる

### 第三節 経済成長と食物革命

以上の内容に言及するまえに一般状勢をのべる。まづ第一は一般世相であるが、これを略年譜によつて示せば次の通りである。

#### 一般世相略年譜

年次	一般状勢	世相
昭和 二七	特需ブーム、朝鮮休戦協定、麦類及砂糖自由販売	中小企業の倒産続出、電気洗濯器普及のはじめ
二八	デフレ時代	東京青山にスーパーマーケット
二九	逆コース時代、日米MSA協定成立 日米余剰農産物協定妥結	五〇銭以下の少額紙幣廃止、黄変米 さうどう
三〇	神武景気、経済自立五カ年計画、米穀未曾有の大豊作、世界小麦相場暴落	アルミの一円玉登場、一〇円牛乳流 行、テレビ電気掃除器普及のはじめ
三一	高天原景気、日本道路公団設立	団地誕生、太陽族登場
三二	なべ底景気	化繊の着物出現
三三	関門トンネル開通	茶色の髪はやる
三四	天の岩戸景気、首都高速道路公団設立、貿易カワセ自由化	みつちいブーム、カミナリ族、カーブーム
三五	安保さうどう、所得倍増五カ年計画	カラーテレビ放送開始、インスタント食品流行
三六	経済高度成長時代	証券ブーム
三七	貿易自由化率八八%、米收穫高新記録	通勤地獄、都市公害、少年犯罪新記録
三八		流通革命(スーパーマーケットの抬頭)交通戦争
三九	経済不況、解放経済体制移行、国際通貨基金八条国移行(IMF正式加盟)	東京オリオンピク、東海道新幹線、名神高速道路、泰平ムード

四〇	物価騰貴時代、日韓基本条約発効	出かせぎ、人材銀行
四一	資本の自由化、ベトナム戦争激化	大学さうどう、ミニスカート登場

戦禍に打ちひしがれた日本が湧き立つたのは、昭和二五年の朝鮮戦争特需ブームがそのきつかけであった。その朝鮮での休戦協定が成立したのは二七年であったが、三〇年には神武景気、三一年には高天原景気、三二年にはなべ底景気、三四年には天の岩戸景気がおこり、三六年から世界をおどろかす経済高度成長時代に突入していった。こうして大戦のいたでから立ち直った日本は、自由世界の一員として次第に大きな役割を果すようになる。昭和三四年の貿易為替の自由化につづいて、三九年には解放経済体制への移行にふみきり、IMFに正式加盟して先進国の一員に加った。そして四一年には資本取引の自由化への第一歩をふみだしたのである。

こうした戦後のあゆみが予想外の好調に終始したのは、朝鮮戦争以来アメリカが日本に対する懲罰政策を放棄して、日本を自由世界のたのもしい一員として遇するようになったからでもあるが、そうした理由はともかくとして、このような日本経済の急激な復興は、国民生活の上昇をもたらしたのである。その結果はいろんな形であらわれている。テレビ、電気掃除器、電気洗濯器、電気冷蔵庫の普及、カーブームとかぞえあげれば際限がないが、これを食生活面に限つてみると、食生活洋風化ブームの進行であった。昭和三五年版の「国民生活白書」は、この点に次の通り言及している。

「食生活についてみれば蛋白食糧としての肉乳卵、ビタミン源としての果物の需要の増大、酒類消費における日本酒よりもビール、ウイスキーなどの洋酒系への嗜好の変化、あるいは飲料における緑茶からコーヒー、紅茶、ジュース類への移行、菓子における和菓子から洋菓子へのうつりかわり、さらに調理法における日本料理から西洋料理、中華料理への移行などかぞえあげればきりがなく」と。

正にこの通りであるが、このような変化は量より質への変化でもあつ

た。

前記の国民生活白書「三五年版」はこの点に次の通り言及している。「終戦後の食糧難の思い出も一場の悪夢としか考えられなくなつたほど現在の食生活はかわつた。それだけ食糧事情の変化は急激であつたのだがこの変化は当時史上未曾有の豊作といわれた三十年産米が実際に消費されだした三一年を境にして、その他の経済的条件の整備と相俟つて、ほぼ安定的な時期に入つたものとみられる。

これを穀類についてみると、三〇年までは供給量不足によつて抑制されていた内地米の需要が急激に増加し、この増加によつてその他の穀物の需要が減退し、三一年には現在の需要構造とほぼ同じ型となつた。そしてその後は穀類消費の主体をなす内地米及びパン、めん類の消費に大きい変化はなく、押麦、外米のみが引きつづいて減少をつづけ、全体としては多少減少の傾向がある」と。

これによると昭和三〇年の大豊作を契機として、内地米の供給が豊富になつた結果、消費者は自由にすぎな穀類を選択できるようになつた。その為には日本人の嗜好に合つた内地米の消費がふえて、そのかわりに準内地米をふくむ外米と押麦の需要が激減し、パンやめん類の需要もやや低下したといふのである。ここで注意すべき点は、こうした食糧事情の好転と共に、穀類の一人当り消費が「全体として多少減少の傾向にある」ことが指摘されていることである。いうまでもなくこれは国民生活の水準が上昇して、割安な穀類食から割高な脂肪、肉乳卵食への移行現象を示すもので、これまた食生活洋風化の一つの現れであるといつてよからう。そしてこのような脂肪、蛋白食への移行は、パン食層にもつと顕著にみられた現象であり、それがパン食量の低下を促した原因でもあつた。これまで四片たべていた食パンが三片になり、二片になり、その代りに脂肪、肉乳卵の消費がふえることになれば、パン食回数はふえたとしても、パン食量は減少するにきまつているからである。

しかし、このようなパン食の衰退現象は昭和三五年でもつて底をつき、

以後徐々にパン食は成長へと転じて行く。そしてそのかわりに内地米の消費が微減の方向をたどりはじめた。それが経済の高度成長がもたらした一般物価の上昇と米価の値上り及び食生活洋風化の定着にあることはいまでもない。

昭和三十七年五月一日の閣議で、農業基本法第八条第一項の規定にもとづく「農産物の需要と生産の長期見通し」がきまつたが、その結論は次の通りであつて、それによると粉食の伸びは米の倍数となつてゐる。

農産物の長期需要見通し総括表（単位千トン）

品目	年度	総量				需要			
		小計	粗	食	外	飼料用	加工用	種子用	減耗
米	昭和三四年	二、三三七	八二二			一八四六	九一〇	四二二	三〇〇
	四六年	A 一、一七二 B 一、三三〇	〇五八			一八六八	八四	三五六	三七四
小麦	昭和三四	三、八一四	七〇二	二二三		三二三	三五五	三五	九六
	四六年	A 四、八六一 E 五、四九〇	五〇七	四七一	四七二	〇二五	二六〇	一七五	一九七

（註）米及び小麦におけるA及びBはそれぞれ需要の下限及び上限を示す。上限は経済成長率が八・七％の場合、下限は七％の場合

以上の通りで米の需要は昭和三四年を一〇〇とする四六年には一〇六乃至一一二となるが、小麦の消費は一一三乃至一四四になるだろうといふのである。

これは国民経済が好転すればするほど食生活が洋風化して粒食が後退し粉食が前進するだろうという正式予測であるが、農林省はこのような予測を行つた理由について次の通り言及している。

「小麦の年間一人当消費量は、三五年度には戦前の三倍近い二五kgとなつてゐる。米は戦前の約八割の消費量に止まつて、推移しているのに反し小麦は米の補完食糧としての性格を脱したとみられる最近も、横ばいしない

し微増で推移しており、都市におけるパンの消費等を中心に小麦の消費が増加しているものとみられる。しかしデンプン質食糧の比重の低下という傾向の中で、小麦にしても食用として飛躍的な需要の増加を示すとは考えられない。

また小麦の消費量の動向は米との競合が考えられ、単に所得弾性値によつて将来の需要量を求めることはできないであらう。

したがつて穀類全体のデンプン質消費量の見通しの下で、米との競合関係を考察して、小麦需要量を予測した。その結果四六年度の年間一人当り食糧需要は、米と小麦の消費割合が現状通りである場合は、約三〇kgとなるので、この幅をもつて見通しとした。したがつて食糧需要として四六年度には三三六〜三九六万噸程度となり、三四年にたいして二割程度の増加となる」と。

しかしこのように時代が粒食から粉食へと移行するとしても、それが直ちにパンの成長につながるとは限らない。三五年版「国民生活白書」はこの点に次の通り言及している。

「米の消費は全体としてみると、ごく僅かづつ減少をつづけている。押麦の消費量の減退はいちぢるしいが、この傾向は今後も続こう。パンもごくわずかづつの減少を続けている。メン類の消費は都市家計では若干減少しているが、外食のメン類は増加している。もつとも伸びているのはマカロニ、スパゲティなどの洋風メン類と即席ラーメンである」と。

このような傾向は昭和三六年ごろからパンの微増、米・メンの微減という方向にかわつてきたが、粒食の後退、粉食の前進という大勢そのものには変りがない。なお、参考までに昭和三〇年代の粉食の種類別伸び率を示せば次の通りである。

小麦粉製品消費量の推移指数

区 分	消費量		指 数
	乾 生	生 生	
三二年	100,000	100,000	100.0
三三年	103,750	101,100	101.1
三四年	104,375	101,650	101.6
三五年	104,375	101,650	101.6
三六年	104,375	101,650	101.6
三七年	104,375	101,650	101.6
三八年	104,375	101,650	101.6

第四節 粒食と粉食の対決

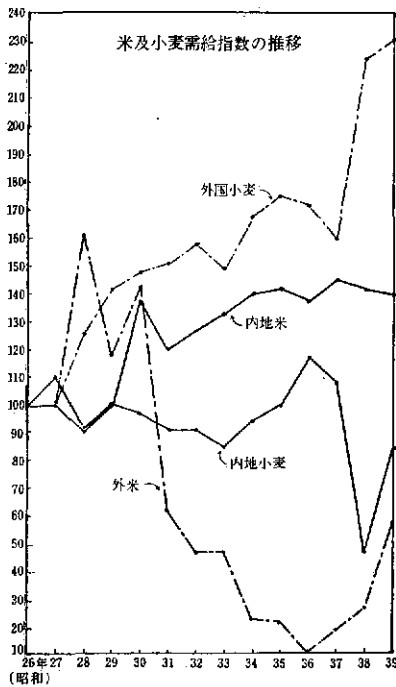
つぎに昭和二七年の麦類自由販売以後の内外米と内外麦の需給状況をみると、あまりし次表の通りであつて、内地米の供給は漸増、外米の輸入は漸減の方向をたどつてゐる。これに対し小麦の傾向はその逆で、生産は漸減、輸入は漸増の方向をたどつてゐる。

これを次表によつてみると、昭和二六年の内地米収穫高は九〇〇万屯であつたが、昭和三七年になるとその生産高は一、三〇〇万屯を突破してゐる。ところが外米の輸入高をみると、昭和二八年の輸入高一四五万屯が三六年になると僅か七万屯に低下してゐる。

このように外米の輸入が減つて内地米の供給が増加したということが、米の小麦粉にたいする競争力を強化する原因であつたことはいうまでもない。昭和三〇年の大豊作を契機としてパンがやや下向き加減の横ばい状態に入つた所以であるが、そのパンが三十年代の後半に入つて微増に転じたのは、消費者米価の値上りと貯蔵米の増加による内地米の味の低下に因るものとみられる。

つぎに小麦の場合をみると、その生産は昭和三六年以後急カーブを描いて低下しはじめてゐる。

その結果当然のことながら外麦の輸入は急上昇しはじめてゐる。これは米の場合と全く逆の現象であるが、外麦の輸入は粉食の質的向上でもあつて、従つてこれが粉食の粒食に対する競争力の強化に役立つとは疑う余地がない。







つぎに穀類全体の日本人一人一日当り供給量の推移をみると次表の通りであつて、全体として粒食の衰退と粉食の前進がめだつてゐる。いま試みにこの統計表から特定の時点を抽出して比較してみよう。

穀類の一人一日当り摂取量の推移（単位：瓦）

年次別	米	穀	小麦	大裸麦	雑穀	計
昭和九一平均	三六九	八	二二、四	三二、三	六、二	四三一、八
昭和二六年	二七一、六	六	六九、八	五八、五	三、五	四〇三、四
〃 三〇年	三〇二、二	二	六八、七	四八、三	五、二	四二四、四
〃 三五年	三二二、三	三	七〇、六	二二、二	三、六	四〇九、七
〃 三八年	三二九、五	五	七三、五	一〇、七	三、二	四〇五、一

以上の通りで穀類の一人当り消費量は、これを戦前とくらべると六%方低下している。これは乳肉卵摂取率の高い西洋型食生活への転換を示すものであるが、その内訳をみると、大・裸麦は三分の一減、雑穀は半減、米は一割減であるが、小麦は三倍以上の伸びである。そしてその小麦食の中で最も大きい伸びを示したものはパンであつた。これは長い目でみるとパン食の将来が明るいことを示すものである。

穀類需給表（単位：一人一日当り瓦）

昭和平均	米		麦 及 び 雑 穀				
	内地米	輸入米	計	小麦	大裸麦	雑穀	合計
二六	二四七、五	二四、一	三六九、八	二二、三	四三、三	六、三	四三一、八
二七	二五三、五	二七、四	二八〇、九	六六、八	三五、五	四、二	四〇九、二
二八	二四六、〇	二八、六	二七四、六	六七、七	四四、七	三、四	三九三、一
二九	二三三、二	五三、九	二七二、二	九四、八	六、二	七、三	三九六、四
三〇	二七二、八	二九、四	三〇二、二	二六、八	七四、八	三、五	二四二、四
三一	二九四、六	二一、二	三三〇、五	八六、五	五四、三	〇、三	五四一、七

三二	三〇二、七	二五、一	三二七、八	六八、八	一四、一	三、二	五四一、七
三三	二九七、八	二一、九	三〇九、七	七六、八	〇三、六	二、八	四二九、七
三四	三〇二、七	七、〇	三〇九、七	七七、〇	七三、〇	三、一	四一三、八
三五	三〇九、三	四、〇	三一三、三	七七、〇	六二、二	三、六	四〇九、七
三六	三一六、八	二、三	三一九、一	七〇、八	八一、五	二、七	四〇八、二
三七	三一七、六	三、六	三二一、二	七七、一	二二、三	二、四	四〇七、九
三八	三一四、六	三、一	三一九、五	七七、三	五一、〇	七、二	四〇五、一

第五節 麦類対米比価の不合理

つぎにライバルである米と小麦の価格の推移をみるとあらまし次の通りである。

1、米 米穀の国際価格はやや上向き加減の横ばいであるが、東南アジア諸国の米の輸出力は次第に低下し、なかには輸出国から輸入国に転落したものもある。これは米の生産高の増加率が人口の増加率を下廻つてゐるためであるが、日本の場合をみると人口の増加率よりも米の生産高増加率はるかに高い。自由経済の原則からいうと、このように供給力が増大すれば米価が下るのが当然であるが、我國の米は統制品であり、その価格は生産者所得保証方式によつてきめられるため、増産と否とに拘らず米の生産者価格は年々上昇の一途をたどつてゐる。そのためにその国際価格との開きは大きくなる一方であつて、いまでは日本の米価は国際価格の倍以上である。国連食糧農業機構の調査によると、現在の米のトン当り生産者価格は、ドルに換算してビルマ三三ドル、アラブ連合四九ドル、アメリカ一〇八ドル、イタリヤ一〇八ドルだが、日本は三〇三ドルであつて、実にビルマの一〇倍に近い価格である。これを輸出価格でみてもビルマ米トン当り一二七ドル、タイ米一三七ドルだから何れも日本の半値以下である。

2、小麦相場 世界小麦の生産過剰が目立つてきたのは昭和二六年ごろからであつた。日本が麦類の自由販売を断行したのは昭和二七年六月であつたが、これはこのような供給力の増加についての見通しが立つたからに

ほかならない。

統計によると昭和二五年の世界小麦輸出(八ヶ国)の年度末在庫は約九百万吨であった。ところがそれが翌二六年になると約二千万吨台にせまり、昭和三六年には六千万吨を突破したのである。しかし以後世界人口の増加速度が小麦の増産速度を上廻つてきた為に年度末在庫は減少の一途をたどっているが、このような事情を反映して国際小麦相場はいまなお割安である。ところが日本の場合は米と同じく生産者所得保証方式に執着しているために、国際相場とは無関係に上昇の一途をたどっている。

現在の小麦の屯当り生産者価格はアメリカ四九ドル、カナダ六八ドル、イタリヤ一七ドルであるが、日本は一三〇ドルである。これは日本の小麦相場がアメリカの二・六倍だということであるが、このように小麦の生産者価格は上つても、その消費者価格は消費者の家計の実状を参酌してきめる仕組みとなつているので、その値上り速度は生産者価格の値上り速度よりもはるかに低い。

その結果政府は割高な内地米や内地小麦を割安な値段で配給乃至払下げしなければならぬので、食管特別会計の赤字は増大する一方である。昭和三二年度のその特別会計赤字は一五〇億円だったが、昭和四二年度の赤字は二、四一五億円となつた。それも低廉な値段で輸入した外麦を高価に払下げて差益をかき、これを食管特別会計の赤字補填に充てた上での赤字であるから、全く馬鹿げたはなしであるが、現実には右の通りであつて、これがパン食普及の大きな支障となつていゝことはいふまでもなからう。小麦の対米比価——いまこころみに政府買入価格の面からみた小麦の対米比価の推移のあとをたどつてみると次表の通りである。

小麦の対米比価変遷表

年次別	米(六〇疋)	小麦(六〇疋)	対米比価
昭和三十一年	三、九一〇円	二、〇三四円	五、〇%
〃 三二	四、〇二九	二、一二七	五、二、八
〃 三三	四、〇一六	二、一一六	五、二、七
〃 三四	四、〇五一	二、〇九一	五、一、六
〃 三五	四、〇六四	二、一四九	五、二、九
〃 三六	四、二八六	二、二八三	五、三、三
〃 三七	四、七五三	二、四〇四	五、〇、六
〃 三八	五、一三三	二、四七三	四、八、二
〃 三九	五、八五〇	二、五九一	四、四、三
〃 四〇	六、四一六	二、七二三	四、四、三
〃 四一	七、〇七八	二、九〇二	四、一、三
〃 四二	七、六九一	三、〇三四	三、九、四

以上の通りで政府買入価格の面からみると、昭和三十一年現在の小麦の対米比価は五二%であるが、四二年現在のそれは三九、四%であるから、この十二年間に麦類の対米比価は一二、六%も下つていゝ。

ところが小麦粉の卸売価格をみると、昭和三十一年現在の一袋一、一〇〇円が四二年には一千一五〇円になつていゝから、その値上り率は四、五%である。

しかし政府買入価格面からみた対米比価は昭和三十一年の五二%が四二年には三九、四%に下つていゝのだから、このような比率がそのまま売り値に反映すれば麦価は大幅に下るのが至当である。それが逆に値上りしていゝのだから、これがパン食普及の大きな障害になつていゝことはいふまでもなからう。

一体このような矛盾がいつまで続くものか、それを予測することはむづかしいが、何れもつと合理的な価格体系に修正される日がくるにちがいない。

なお、ここで昭和三〇年以降の小麦粉卸売価格の推移を示せば次の通りである。

小麦粉卸売価格の推移（一袋当り）

年次別	強力粉	普通粉	薄力粉
昭和三〇年	一〇〇〇円	九〇〇円	〇九〇円
三一	一〇〇〇円	九九五円	〇八七円
三二	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三三	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三四	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三五	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三六	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三七	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三八	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
三九	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
四〇	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
四一	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円
四二	一〇〇〇円	九〇〇円	〇八七円

以上の通りで麦価の値上りがややめだつてきたのは昭和三八年以降であつた。

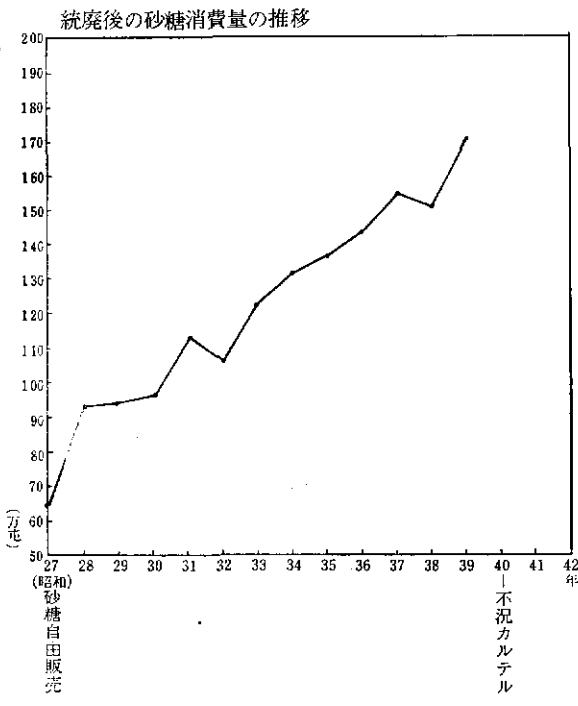
第六節 砂糖、油脂、酵母の歩み

次に統廃後の砂糖、油脂、酵母の歩みの跡を数字によつてたどつてみよう。

(1) 砂糖について

昭和二八年に暴落した糖価はやがて回復して、以後さしたる波乱もなく推移したが、砂糖が自由化された三八年から、俄然糖価が暴落して、糖業界は一大混乱状態に陥つた。そのために四〇年には不況カルテルがつくられたが、これによつて糖業界のいたでを回復することはできなかつた。こ

の混乱は今日まで尾をひいている。  
それはともかくとしてこうした糖価の動揺が、大きく砂糖に依存する菓子パン業界にとつて悩みのタネだつたことはいうまでもないが、特にパン業界にとつて大きなマイナスとなつたのは、大手の糖業者が中心となつてしばしば砂糖の値上げを策したことであつた。しかし戦前とちがつて戦後の日本には公取法がある。そのために砂糖、小麦粉、油脂、イーストなどの業界で目に余る値上げ協定が行なわれると、それが公取の問題としてとりあげられ、協定破棄を命ぜられるという事件が相次いでおこつた。  
なお、左記は統廃後の砂糖の需給事情及び卸・小売価格の推移を示す数字である。



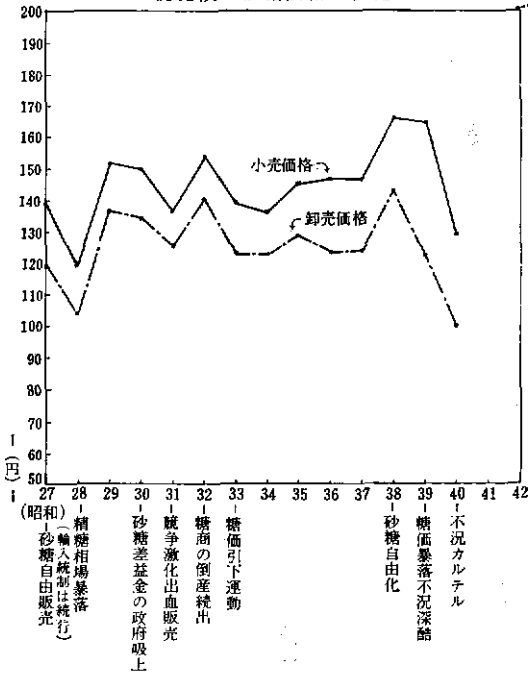
統廃後の砂糖消費量の推移 (単位千トン)

年次別	生産高	一人当り砂糖消費量(吨)
昭和二十七年	六三六	一四、一一
〃 二八	九二九	一四、〇一
〃 二九	九四三	一六、二九
〃 三〇	九六二	一六、五〇
〃 三一	一、四三三	一七、三一
〃 三二	一、〇七三	一七、六八
〃 三三	一、二二八	一九、四二
〃 三四	一、三二二	
〃 三五	一、三六四	
〃 三六	一、四三三	
〃 三七	一、五四八	
〃 三八	一、五二五	
〃 三九	一、七二二	

統廃後の砂糖価格の推移

年次別	卸売価格 (kg当)	小売価格 (kg当)
昭和二十七年	一一九、七七 円	一三九、〇七 円
〃 二八	一〇四、一五 円	一二〇、一五 円
〃 二九	一三七、三七 円	一五二、〇九 円
〃 三〇	一三四、八八 円	一四九、七八 円
〃 三一	一二五、七〇 円	一三七、三〇 円
〃 三二	一四〇、七五 円	一五三、八〇 円
〃 三三	一二三、〇七 円	一三八、九一 円
〃 三四	一二二、六一 円	一三六、一三 円
〃 三五	一二九、二二 円	一四五、二九 円
〃 三六	一一三、七三 円	一四七、二九 円
〃 三七	一二四、三九 円	一四六、八三 円
〃 三八	一四二、六八 円	一六六、五〇 円
〃 三九	一二三、三五 円	一六四、九〇 円
〃 四〇	九九、五八 円	一二九、六〇 円

統廃後の砂糖価格の変遷



(2) マーガリン・ショートニングの推移

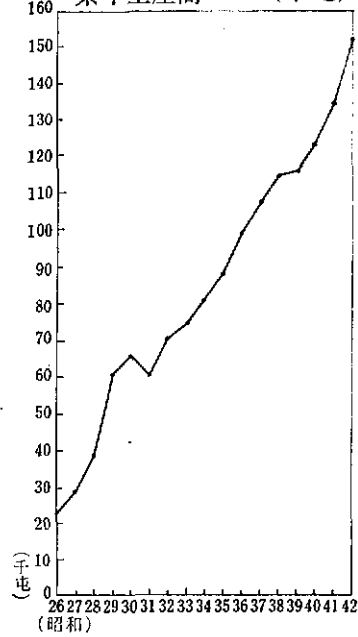
統廃後のマーガリン、ショートニングのうごきを見ると、未曾有の大豊作だった昭和三〇年をのぞき、大体において高度成長の連続であった。これは戦後国民生活の水準が上昇して、その食生活が急速に洋風化していったことを示すものである。

昭和二十七年現在のマーガリン、ショートニング生産高は二万九千屯であったが、昭和四二年にはそれが十五万三千屯を突破している。実に五倍以上の高度成長であるが、これがデン粉質食量の一人当り消費の微減と相反する現象であることは改めて指摘するまでもあるまい。

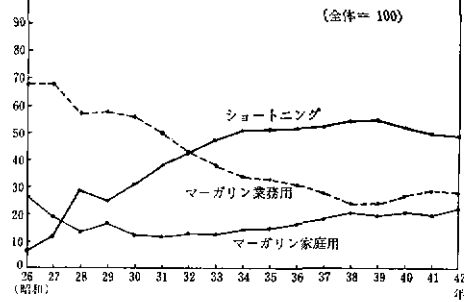
パン業界にとつて深い関係のあることは、統廃後マーガリンが急速にショートニングにきりかえられたことである。このような変化がもたらされたのは、もちろん油脂の加工技術革新のたまものであるが、同時にパン業

界が統制撤廃以来その品質改善にとめたことを示すものでもある。  
 なお、左記は統廃後のマーガリン及びショートニング生産高の推移表である。

マーガリン・ショートニング  
 累年生産高 (千屯)



終戦後のマーガリンショートニングの生産高比率



統廃後のマーガリン・ショートニング  
 累年生産高推移表 (屯)

年次別	マーガリン		ショートニング		家庭用マーガリン		総計
	業務用	%	業務用	%	業務用	%	
昭和二六	一五、七八六	六七、七	一、五〇四	六、四	二五、九	二、三	二二、三
二七	一九、九九九	六八、五	三、五七五	一、二	一九、三	二、九	二二、九
二八	二二、三六一	五六、六	四、三三九	二、九	一四、四	三、九	二九、四
二九	三五、四八六	五七、八	四、四二四	二、五	一七、〇	六、一	三三、四
三〇	三六、七一〇	五五、九	四、四〇八	三、一	一七、〇	六、五	三三、五
三一	三〇、一三二	四九、七	〇、四八	三、八	一三、〇	六、〇	二七、〇
三二	三〇、二六一	四二、九	七、九一	四、三	一三、四	六、〇	二七、〇
三三	二八、六〇七	三八、三	九、九八	四、八	一三、五	七、〇	二七、〇
三四	二八、〇五七	三四、四	四、一七	一、〇	一四、六	七、四	二七、〇
三五	二九、四一七	三三、二	四、四一	一、五	一五、三	七、四	二七、〇
三六	三一、二二三	三一、二	五、一八	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
三七	三〇、四〇三	二八、一	五、一八	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
三八	二七、三七四	二四、一	五、一八	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
三九	二八、〇六四	二四、一	五、一七	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
四〇	三三、九四二	二七、三	五、一七	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
四一	三三、九三二	二七、三	五、一七	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇
四二	四〇、〇〇二	二八、四	五、一七	一、七	一七、〇	八、一	二七、〇

(3) イーストの推移

生パンとイーストは表裏一体の関係にある。従つて昭和三〇年の未曾有の大豊作は、まだ米の代替的な性格をもつていた生パンにとつての一大打撃であつたが、パンの伸びなやみはイースト産業の伸び悩みでもあつた。したがつて昭和三〇年代からイースト業界の販売競争は激化の一途をたどつたのである。

その結果イースト業界の中には大きな異変がおこり、生産量の少い副業

的メーカーは次々にこの分野から足を洗っていった。  
 脱落していった主なるメーカーはことぶき屋、日本酒類、わかもとなどであるが、その脱落が必然であつたことは、次の統計資料によつてみられる通りである。

イースト企業の集中しらへ (昭三〇)

会社別項目	生産高 (千ポンド)	企業別集中度 (%)	累計集中度 (%)
オリエンタル酵母	七、一九四	一九、八	一九、八
大日本製糖	五、六七〇	一五、六	三五、四
日本甜菜糖	四、六五七	一三、八	四八、二
鐘淵化学	四、〇二八	一一、一	五九、三
東洋醸造	三、六七五	一〇、一	六九、四
三共	三、三四七	九、二	七八、六
ことぶき屋	二、一四九	五、九	八四、五
中越酵母	一、八六二	五、一	八九、六
日本酒類	一、六六八	四、六	九四、二
わかもと	一、二六一	三、五	九七、七
その他	八三二	二、三	一〇〇、〇

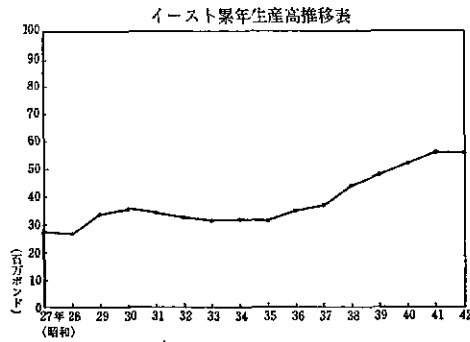
(公取調)

イースト業者の中にはその不況をきりぬけるために、イーストの品質を改善して、パンの潜在需要を喚起しようとしたものもあつた。その顕著な一例は昭和二九年にオリエンタル酵母がスタンダード・ブランドの技術導入を策じたことであるが、これはイースト業者の猛反対で一頓坐してしまつた。

こうして為すところなく不況に直面したイースト業界は昭和三三年に不況カルテルをつくつて、その局面を打開しようとしたが、これまた充分の成果を挙げるに至らず、遂に業者の半減という結果をもたらすに至つた。

である。

なお、左記はパンの自由販売以後のイーストの累年生産高である。



イースト累年生産高推移表 (単位千ポンド)

昭和	年次別	生産高	年次別	生産高
二七	二七	二七、五七九	三五	三一、七七一
二八	二七	二七、三八四	三六	三四、五八五
二九	三三	三三、五八一	三七	三七、三九五
三〇	三六	三六、三四八	三八	四四、〇三〇
三一	三四	三四、七三三	三九	四八、三四一
三二	三一	三一、六五四	四〇	五二、四二九
三三	三一	三一、〇五九	四一	五五、七三〇
三四	三一	三一、六七四	四二	五六、一九七